

生^{せい}

中村 辨 康

人 生 篇

人生と理想^{じんせいとりよう}利 財^{りざい}□望^{のぞ}みのない人生^{じんせい}は、空洞^{くうどう}に均^{ひと}しい。随^{したが}つて望^{のぞ}みなき人^{ひと}は一日^{いちにち}も生^いきては居^ゐられない筈^{はず}である。此^この世^よに生^{せい}を受^うけて居^ゐる限^{かぎ}り、如何^{いか}なる者^{もの}も、希^き望^{ぼう}を持^もち、理^り想^{きよう}を持^もつ筈^{はず}である。
たとへ、それが何^どんな形^{かたち}であらうとも。□だが、一般^{はんてき}的にそれらは官能^{くわんのうてき}的な極^{ごく}下^か等^{とう}な夢^{ゆめ}か、一^{いつ}時^じ的な名^なに對^{たい}する幻^{まぼろし}かに過^すぎない。

名

譽

先づは金か。名か。之が兩大關でもあらう。

現實生活を豊かにする爲めに、何んな人でも、金に對しては血眼になり勝である。

物體ぶつた賢者でさへ「恒産なきものは恒心なし」などとも云つて居るではないか。

それをまた慾の淺くない連中が、金科玉條のやうに、自分の金蓄め主義の莊飾塗料に轉用して居る。

見て見るがよい。

無信仰な我利一點張りの人達に一人として恒心ある者があつたであらうか。

虎の爪を磨ぎ、狼の牙をむく。

其處に何んな恒心があるのであらうか。

或は「子孫の爲めに」とも云つて居る。

果して其の子孫達が幸福であつたであらうか。

其處には唯だ苦勞が残されて居るだけだつたのである。

□名譽にしたつて、やはり同じである。

苦心して高い社會的地位を得たところで、そんなところに人生の本當の幸福などはありはしない。

煎じつめて見れば、皆な夢の中の笑ひにしか過ぎない。

愚痴ぐち——ところおろ
かしきこと
橋慢きょうまん——たかぶり

果はたして本當ほんたうの人生じんせい
か
汗膏尿あせうしの身み——き
たない此この身み。
願ねがひ——いかり。

得えて了しまへば、却かへて苦勞くろうの種たねが増なすだけである。
そして更さらに隴ろうを得えて蜀しよを望のぞむ氣きも起おこつて、却かへて望のぞみの爲ために身心しんしんを焦こすのである。
何處どこに人間にんげんの幸福かうふくがあつたであらうか。

□金かねなき者は金かねに憂うれひ、金かねある者は金かねに憂うれふ。

名ななき者は名なに憂うれひ、名なある者は名なに憂うれふ。

丸まるで貪慾とんよくに驅使くしせられて、愚痴ぐちか橋慢きょうまんかの間あだを往來わうらいし、奔命ほんめい之れ事こととして道みちには勞くたれ
てしまふのが落おちである。

偶々たまたま現在の地位ちゐや財産ざいさんに満足まんぞくし得えても、子こなきは子こあらんと望のぞみ、子こあれば子この爲ために
惱なやむ。そして家内かさいに風波ふうはが起おこり、親類しんるいにゴタゴタが生うれる。

何邊どつちにころんでも苦勞くろうは絶たえはしない。

□然しかかも内うちを省かへりみれば汗膏尿あせうしの身みを抱いだいて、徒いたづらに食とを求もとめ、捷かちを追おひ、疑惑ぎわくと
瞋恚しんにとの中うちに、空はなしく煩悶はんもんし懊惱おうなうして居ゐるのである。

之これが果はたして本當ほんたうの人生じんせいなのであらうか。

何處どこに人生じんせいの貴たかさがあるのであらう。

何處どこに人生じんせいの得難えがたさがあるのであらう。

人間の取り柄

□健康や膂力の上からは、獅子や象に比すべくもなく、壽命長生の上からは松杉千年の壽に匹敵すべくもない。

心の動搖しない事は山嶽にも及ばず、物に拘泥しない事は河水にも及ばない。色彩の艶美なる事は花鳥に及ばず、相好の端麗なる事は工藝品に及ばず、音聲の律呂は虫鳥に及ばず、動作の精微は機械に及ばず。何處を選び出して、山家育ちのローズ品ばかりではないか。

□だが、何處かに何か取り柄がありさうなものである。人間の人間たるところが。そして人間でなくてはあり得ないところが。

ある。ある。

何處に。

偽をつくのがうまいことか。

そんな惡の華ではない。

では、算盤勘定の上手なことか。

そんな功利的なものではない。

では、戀をさゝやくことか。

そんなのは虫の世界にだつてある。

正しい人間生活

萬物の興長

では、屁理窟をこねることか。

成程、それは人間特有のものらしいが、そんな煩瑣なくだらないものではない。

では、眞實を求め、藝術を創造し、道徳を行ふことか。

成程、それらは人間でなくてはかなはぬ崇高なものかも知れない。

然しそれらは夫々の部門に分れて居て、全一的なものでもなく、且つ萬人に適應して

も居ない。

然らば何だ。

イヤ、事は簡単なのである。即ち、人間が本當の人間になること、人間が本當に人間らしい生活をする事、其事である。

□正しく人生を完うすること。

其處に大眞實があり、大藝術があり、大道德がある。

此の正しき人生なくして何の眞理探究があらう。

此の正しき人生なくして何の藝術創造があらう。

此正しき人生なくして何の道德躬行があらう。

□考へて見るがよい。生物最高の進化の極は、人體である。人心である。

いの身の心

單細胞生物から幾百萬年の長年月と、幾千億萬の命とを費し、數へ盡せない苦悶苦闘をつゞけて、人類にまで到達したのは、單に人間をして我儘勝手な事をやらせる爲のものではない。幾多の天地を積み重ねても尙ほ足らない程の大犠牲を盡くして、肉體的にも精神的にも完全に近い人間と云ふ一類の生物を作り上げたのは、人間をして人間たらしめる爲めに外ならないのである。

夫れは實に大自然の意志力の然らしめたものであり、大自然の奥に内在する大精神動力の然らしめた結果である。

よし、假りにそれが大意志力と云ふやうなものでないとしても、其數へ切れない幾千億萬の大犠牲に對して、深く想ひを致しそれに報ゆるところがなければ、それは本當の「耻しらず」であり、「大痴漢」であつて、是程大きな罪惡はないと云つてよい。だからこそ、せめては私達人間が正しい人間生活を完ふすることその事が、是等の大犠牲に對する萬分の一の報恩行であらう。

□此身は成程今の處、罪惡の結晶と云へやうが、此身なくしては、善を積み徳を累ねる事は出来ない。

此心は成程今の處、醜惡の巢窟かも知れないが、此心なくしては、人生の歸趣を明かにし眞生を開顯する事も出来ない。

冥

加

して見れば、人生に於ける智育も徳育も體育も情操涵養も、皆な悉く人間をして本當の人生を行はしむるところに、眞實の目標がなくてはならぬ。

□此心をして眞實に生かしめ、此身をして眞實を行はしむる。
此處に人間生活の尊嚴さがある。

□況して私の今日あるは、幾多の生物を殺し、幾多の生物の肉を喰ひ血を吸つたからである。米の一粒も完全に生きたものでなくては甘くはない。野菜の一束も完全にその漿液が流れて居たものでなくては甘くはない。野菜も穀類も其生きた肉生きた血を人間に提供し、生きて居た命までも人間に與へて、人間の生を保たしめて居るのである。

其恩恵に對して何の報ゆるところもなく、手前勝手な我儘ばかりしてのさばつて居るならば、既に冥加に盡きたものであり、冥加を恐れざる人間なのである。だからどうせ祿な終末をしないことは、知れ切つた事である。

□少くとも萬物の精髓が集つて骨となり髓となり肉となり血となつて居るのである。

身心の大維新

人間精白

少くとも萬有の靈髓が凝つて智慧となり感情となり意志となつて居るのである。だから此身をくだらなく單に一日のばしにのばして居るだけならば、それ丈萬物の精髓を空費して居るのである。

そして此心をくだらなく浮いては消え、消えては浮ぶつまらない欲求に使役させる丈ならば、それ丈萬有の靈髓を犬死させて居るのである。

□茲に思ひを深くして、私達の身體と精神とに「大維新」を斷行しなければ、本當に折角人間になつた甲斐がない譯である。

今迄ヤクザ者であつただけに、一層「注意力」を働かして反省し批判し覺醒し轉進して、正しく人生を完ふすべきである。

かくして始めて白道は坦々として拓け、平安健全なる生活が打ち立てられるであらう。さも無くしては糟を去り糠を取つた眞白な米の飯にはなり得られまい。

心の穢れを去り、行ひの垢を無くなす「精神維新」こそ、人間をして正しき人間たらしむるものであり、人間ならずしてはなし能はぬ聖なる行動である。

念佛篇

□人間が正しい人間生活をなし遂げるに就ては、此の生活の中の糟を取り去り糠を

人格の轉換

戒法||精神生活
の規準
戒體||戒法の實體
靈格の確立をさす

取り去らなくてはならぬが、現代のやうな煩瑣なそして鋭敏な物質文化の濁流の中にあつては、餘程の努力と忍耐とがなくては出来ぬことである。

普通の状態で、かうした心づかひは中々出来る譯のものではなく、結局一日延ばしに延ばして仕舞つて、どゞのつまりまでやらないじまいになるのである。

それは畢竟さうしなくても、何うやらからやら生活して行けるからであり、正しさや完全さを要求する氣持はあつても、當面の事に追はれて、思ひ切つて改善する強い心がないからである。

其上社會意識や良心の正義觀と云ふ律法的なものには、嫌やな壓迫感があつて何うしても手が出ししより勝だからでもある。

□佛教で謂ゆる戒法と云ふものは、人間生活の規準を云つたのだが、それには「戒體」を獲得しなくては駄目だと云つて居る。戒體獲得とは人間生活をなす中心が、今迄とは全然違つたものに置きかへられたことである。

つまり放蕩息子が心から悔ひ改めて、眞人間になつたことであり、人格轉換したことである。

放蕩無頼な息子が本心から改心するには、良心に攻められて翻然として懺悔すると云ふ場合もたまにはあるかも知れないが、多くは、親の慈悲に感泣して悔ひ改めると云

宗教訓練

祈禱

坐禪

戒定かいぢやう || 戒法かいほふと禪ぜん
定ぢやう

ふのが定法ぢやうほふのやうである。

□だから、一般的な生活せいかくわつを改善かいぜんするには、其人そのひとの精神せいしん的中核ちゆうかくが轉換てんくわんする程ほどの感激かんげきがなくてはならない。

さもない限り、たとへ決心けつしんしたところで一時的じてきな氣まぐれに終る事ことにもならう。かうして精神せいしん中核ちゆうかくの轉換てんくわんは、中々なか／＼普通の道徳だうとく的な律法りつぽふや良心りょうしんなどで、出來る筈はずのものではない。

□そこで何うしても宗教訓練しやうけうくんれんと云ふものが必要ひつやうになつて來る。

即ち祈禱きたうとか坐禪ざぜんとか觀法くわんぽふとか念佛ねんぶつとか云ふものがそれである。

祈禱きたうには二通りあつて、病氣びやうきが癒なほるやうにとか相場さうばが上がるやうにとか云ふやうな功利的りてきなものもあるが、それは本當ほんたうのものではない。

正しい祈禱きたうは神かみの如き心こころ、佛ほとけの如き心こころに、我が心こころをあらしめたいために、神佛しんぶつの加被かひ護念ごねんを祈いのることである。

坐禪ざぜんにも二通りあつて、精神統一せいしんとういつして虛無きよむ的空觀くうくわんに入り人生じんせいから超越てうえつしてお高くとまつて居ゐやうとする獨善どくぜん的なものもあるが、それは本ほんものではない。

正しい坐禪ざぜんは戒定かいぢやうの二つの訓練くんれんを以て人格統一じんかくとういつをなし自我見じがけんから脫落だつらくして公正こうせいな人間にんげん

觀くわん
法ふ

念ねん
佛ぶつ

正しい信仰しんかう

生活を打ち立てんとするところにある。

觀法にも幾つかの種類がある。本當のものは正しい宇宙觀人生觀を獲得することである。ところが兎もすれば異常變態に墮ち易く、禁厭祕法を行つて謂ゆる淫祠邪法が産れ勝ちである。

念佛にも色々なものがある。眞言陀羅尼風に用ゆるもの、災難除けの雨傘流のもの、貯金流義のもの、苦しい時の神頼み風のもの、極樂行きの切符代用にするもの、精神統一の催眠術代りにするものなど、考へるとまだあるかも知れない。

然し本當の念佛はそんなものではない。刻々に自分を反省し、念々に正しさを求めて行く完全な宗教訓練法の随一である。

即ち念佛の中には自ら正しい祈りもあり、正しい坐禪もあり、正しい觀法も含まれて居るからである。

□正しい信仰は平常正態の中に顯はれて來なければならぬ。神經衰弱的な變態に依て得たものは曲歪された信仰である。

また、中正穩健な姿でなくてはならぬ。逆境難局の中から生れたものは異常なものであり病的信仰である。

第三には金剛不壞なものではあるが、一種の固陋偏執であつてはならない。信根は確

信進 || 信仰と精進

念佛の優越

固として居て、しかも日々に新らたに信進開發されて行く可き筈のものである。つまりは素直に天地の大道に一致して行く可きもので、小休みをして居る状態のものでは斷じてない。

□また祈禱や坐禪や觀法やは大體に於て先づ以て場所の選擇がある。一定の時間がいる。形式が要る。準備教養が要る。服裝も改める必要があり、心がまへも普段と替へなくてはならぬ。

即ち何處で何時誰が何んな事を何の位やると云ふ必要條件がなければならぬのであるが、念佛では何處でも何時でも誰でも何んな姿でも何れ位でも、何等の制限がないのである。

初めは仕事し乍らの念佛でも、

遂には念佛の中の仕事と變つて来る。

即ち念佛は、佛の生活に歸一せんとする運動だからである。

念佛の威徳

□念佛して居ると、自ら心が素直になる。随つて段々自己が拙り下げられる。

自己が拙り下げられると自ら佛への信が感激の中に盛り上つて來、そして生活が段々淨まつて来る。

念佛の根源

それは恰度拙ぬき井戸の水源が深ければ深い程、高く清冽な水が豊富に吹き出るのと同じ理である。

□念佛して居ると何故心が素直になるのか。

念佛の中には全然自我的な意味がないからである。

初めは自己流の自我的な念佛であつても、それは心と念佛とがチグハグになつて落着くことが出来ないから、次第に心の奥の本心が落着きを要求して、自然に自我的な氣持を訂正させるからである。

□また一方には自ら天地の大恩大力大生命を感じて来る。

闇い氣持が薄らぎ、明るい氣が伸び上がつて来る。

それは何故だらうか。

□念佛は元來大宇宙の綜合的意志としての「願態」から流出して來たものだからである。

即ち天には日月星辰が寸時も倦むことなく蒼生を照らし育てて居る。適當に光線と熱線と化育線とを以て、直接にも間接にも偉大な「働き」をなしつゝある。

阿彌陀無量の
意法藏阿彌陀佛の
前身の名

願望と願望

報恩行

地にはまた、水や風や空気や土壌やの有らゆる設備を以て草木が繁り鳥獸生じて、米
麥蔬菜、鶏牛蠶蜂、それらの一切を捧げて人間への恵みを惜しんでは居ない。
然かも其恵みの中に居らしめて、其上に果しなき生命と限りなき幸福を望ましめて居
るのである。

此の人間のみに與へられたる本當の望みは「無量壽」と「無量光」との源泉として、
天地間に「阿彌陀」の「願」が充滿し、しかもそれを一法藏菩薩の卓越せる洞見に依
て、四十八の本願として表示され、其本願表示の中心と、人間願望の中心とが凝つて
一つとなつて、遂に「念彌陀法」たる「南無阿彌陀佛」が産れ出たのである。

□かくて天地を包む「願望」が「阿彌陀佛」を表現し、人間の有する「願望」が
「南無」の信仰意志となつて遂に「念佛」と云ふ形式が開顯されたのだから、其の中
には自然に天地の大恩が感じられ、天地の大力が感じられ、天地を貫く如來の大生命
が感じられる譯が含まれて居るのである。随つてそれは一時的な感激ではなく、永遠
の感謝となるものである。

□恩を知つて恩を報じないものは、天地の大道にはづれて居るから、結局亡びるよ
り外に行き方はない。

眞實しんじつの念佛ねんぶつ

隨したがて天地てんちの大道だいたうに依よつて生いかされて居ゐる限り、如來にょらいの大生命だいせいめいに隨順ずいじゆんして、人間生活にんげんせいゐを正ただしき上うへにも正ただしくして行くのが、本當ほんたうの報恩行ほうおんぎやうであり、天地てんちの大道だいたうに一致いちする行動かうどうでもある。

□此處ここに眞實しんじつな念佛ねんぶつがある。

□私達わたくしたちの行爲かうゐは口くちと身みと心こころとの三みつより外ほかにはないが、心こころを表現へうげんするものは言葉ことばであり、行爲かうゐを決定けつていするものは言葉ことばである。だから心に佛ぶつを念ねんじ、身みに覺醒生活かくせいせいゐをするのも念佛ねんぶつではあるが、それを表現へうげんしそれを實行じつかうさせる最も基礎きそ的なものは口くちに出だす念佛ぶつである。

それは恰あたかも軍隊ぐんたいに於おて、號令かうれい一つで數萬すうまんの精銳せいゑいを行動かうどうせしむる道理だうりに均ひとしいものである。

□まだ全體ぜんたいを統率とうそつする程ほどの訓練くんれんを経て居ゐない一兵卒いへいそつが、直ただちに號令かうれいを以もつて全隊ぜんたいを動かうごかすことが出来できないやうに、まだ信仰しんかうを得えて居ゐない者が一遍ぺんや二遍へんの念佛ねんぶつで人間生活にんげんせいゐを正ただしくする事は困難こんなんかも知しれないが、段々だんぐん自分の心こころが念佛ねんぶつに依よつて訓練くんれんされて來きれば、自然しぜんに正ただしい生活せいゐが打ち立たてられるのは火ひを見るよりも明あかである。

念佛と人生

□かくて私達は念佛に依て次第に明るくなり本當に幸福になり、随て永遠の生命を自覺し、人生最高の幸福を味ふことが出来るのである。

□私達は人生を讚美しよう。

そして淨らかな白道を念佛と共に行進しよう。

□念佛と人生。

これが一つになつた「念佛の人生」。

其處にのみ本當の生きる力を發見する筈である。

其處にのみ本當の人間の望みが達成せられる筈である。

讀むべき哉、念佛の生活。

讀むべき哉、念佛の人生。

◇佛典說話全集 全十三冊揃 窪川 拾五圓

◇國譯一切經 全百五十五冊揃 窪川 百拾圓

古本宗教書籍目錄

最近古書時報

御入用の方は各冊とも送料二錢づゝ御送附を乞ふ。

電話小石川三七七〇番

東京市小石川區白山前町

振替 東京五七三七番

窪川書店